「つふう……これで少しは落ち着いたな」

玖我なつきは額に浮かぶ汗を腕で拭いながら、引つ越して来たばかりの部屋を見渡してそう呟いた。

積み上げられた段ボールに出しっ放しの衣類、本類、その他諸々。

辺りには色々と荷物が散乱していたが、まだ足の踏み場はあると言った感じだ。

「あ、そうだ。結局引越しの準備で忙しくて挨拶回りとかしてなかったからな……しに行くか」

非常に面倒臭そうにしながら、なつきはご近所に配る為の粗品を手にする。

最近はその言う事をしない人が多いが、其処ら辺はしっかりとしておくようにと父親からきつく言われていた。

何せなつきはこれから、学生の身で一人暮らしをしなければいけないからである。

本来であれば両親と一緒に暮らすのがベストだろう。

しかし父親は貿易会社の社長をしている為、日々海外を飛び回る生活になつきを付き合わせるのは可哀想だと

考えて、必要以上に警備が嚴重なこの高級マンションに住まわせる事にしたのだ。

では母親と一緒に住めば良いではないか、となりそんなものだがそうもいかない。

家庭不和があるとか仕事の関係などではなく、なつきがまだうんと幼い時分に交通事故で亡くなっていたからだ。

故に父親は今まで家政婦さんを雇って面倒をみて貰っていたのだが、それが悪かったのか、なつきは家事が壊滅的に駄目な少女へと育ってしまった。

これはいけないと考えたのもあり、この機会に身の回りの事は自分で出来るようにと、父親は一人暮らしと言う訓練をなつきに与えたのだ。

しかし可愛い一人娘である事には変わらず、何かあってもすぐに駆け付けてやれない身の上なのもあって、日頃からご近所と仲良くしておきなさいとこの引越しの際に口を酸っぱくして何度も言っていた。

その気持ちが判らないでもないなつきは玄関を出て、まずは左隣の住人へと挨拶するべくそのドアの前に立つ。

あまりこう言う事が得意でないからか緊張で硬い表情になっていたが、それでも次の瞬間には勇氣を出してインターホンを鳴らした。

『はい、どなたさんやろか?』

こちらの様子がインターホンにあるカメラを通して見えていのだろうか。

年端もいかない少女が緊張した面持ちでやって来たのが不思議らしく、家主の声はきよとんとした感じを孕んでいた。

それに対してなつきは、今日隣に引越して来た者です、と単刀直入に答える。

すると家主は今すぐに出ますと言つて通話を切つた。

……今のとつて、関西弁?

いや、それにしてもヤケにはんなりしてたな……もしかして京都の人だったりするんだらうか?

そんな憶測をしている内にロックを外す音が鳴り、間髪を容れずに家主が姿を現した。

「お待ちせしました」

先程と同様に……いや、インターホン越しに聞いていた以上に、彼女ははんなりとした口調で出迎えてくれた。その人を見た瞬間、なつきは思わず粗品を落とす。しかし家主が咄嗟に拾つてくれたお蔭で事なきを得たが、当然のようになつきを怪訝な面持ちで見遣つた。

「急にどないしましたん?」

「え、あ、あ、す、すみません」

そう言いながら、なつきは粗品を受け取る。

だがこれは元々贈呈品なのだから彼女が持ったままで良かったのだと思ひ直して、すぐに品物を押し返した。

「あの、これっ、貰つて下さい」

「これ……もしかして挨拶の品やろか?」

「あ、はい、そうです! 中身はお菓子です、良ければ召し上がって下さい」

彼女の察しの良さに助けられたなつきは、完全に棒読みで言葉を返す。

それに彼女は更に笑みを深くした。

恐らくこの言葉は、何度も練習したのものなのだろう。

見るからに緊張した様子で手を何度も強く握り締めながら視線を右往左往させていれば、誰にだつて判る事だ。彼女はそんななつきに対して、たおやかに小首を傾げてみせる。

「おおきになあ、ありがたく頂きます。

ああせや、ご挨拶が遅れましたな。

うちの名前は藤乃静留言います、これからあんじょうお願ひしますな」

彼女——静留がそう言えば、なつきはぼかーんとした表情を浮かべた。

それは彼女の笑顔に惚けているのではなくて、言われた言葉の意味が判らなくて呆然としているに過ぎない。

あまりにもなつきの表情が露骨だったのもそうだが、普段からこう言った事がよくあるのか、すぐにそうだと察した静留は苦笑交じりにペコリと軽く頭を下げた。

「ああ、堪忍な。あんじょう言うんは、具合よう、つて意味なんよ。

標準語で言うたら、よろしくお願ひします、つて意味やね」

「そうだつたんですね。

こちらこそ、よろしくお願ひします」

そう言いながら、なつきも静留と同じようにペコリと軽く頭を下げる。

その容貌はとても端整で何処か鋭いような印象を受けるが、それに反して酷く緊張したり、素直に人の言った事を受け入れたりする所が可愛らしくつて、静留はついコロコロと微笑んでその姿を見詰めた。

顔を上げればそんな笑顔が待ち受けていたなつきはなんだか気恥ずかしい気分になり、思わず視線を彷徨わせる。

すると相変わらずの笑顔で「そう言えばまだお名前聞いてませんけど、なんて言われるん？」と訊かれた。

そう問われて初めてまだ名乗っていなかった事に気付いたなつきは、慌てて居住まいを正して開口する。

「私の名前は玖我なつきです。

不束者ですがよろしくしてやって下さいっ」

二度目の挨拶と共にそう述べた次の瞬間、ぶつと静留が噴き出した。

突然のソレに訳が判らなくて「え!？」となつきが動揺の声を漏らすと、お隣さんは笑う口元を隠しながら応えてくれた。

「いや堪忍。 なんか嫁入りでもするよなセリフやつたから、つい」

そう言われて初めてその事を自覚したなつきは、かあと顔を赤くさせる。

そんなウブなりアクションを見せられれば誰だつて口角が半ば必然的に上がつてしまうと言うもので、なつきが他の部屋へと挨拶に向かうまでずっと笑顔を浮かべて他愛のない談笑を楽しんだ。

そうして人の良さそうなお隣さんと知り合ったなつきは無事に挨拶回りを済ませて帰宅したのだが……玄関から覗く生活感のない我が家に自然と憂鬱な溜息が出た。

今まで一人で過ごす事の方が多かったのもあって其処は一人ぼっちなのだと思わなかったものの、いざこうして自分しい気持ち覚えすにはいられない。

しかしその感傷はすぐに和らいだ。

何故ならお隣さんがあんなに優しそうな人だと判つたからだ。

別に何かある訳ではないが、それを知っているだけでなんとなく落ち着く事が出来た。

「にしても、驚いたな……」

そう呟いたなつきは、目蓋の裏に隣人の姿を思い描く。ドアが開いて彼女が現れた時、思わず動揺して粗品から手を放してしまう程に美しいと感じた。

波打つ亜麻色の長い髪と目鼻立ちの整った上品な顔立ちに豊満なボディ。

仄かに漂う香りは何処か甘くて、世の中にはこんな人も居るのかと内心本気で驚いていた。

そしてやはり京都の出身らしく、成程そうかと少し話ただけで深く納得した。

あの声色で奏でられる言葉は、とても心地が良かったと思ひながら。

そんな事を考えて玄関口でぼーっと突っ立っていたなつきは、不意にその事に気付いて「私は何をやっているんだ」と言いつつ靴を脱ぎ、まだ散らかっている部屋の

中へと身を躍らせる。

その頬は、僅かに赤くなっていた。

——そうしてなつきの慣れない新生活は始まった。

料理も洗濯も、何もかもを自分でやる。

部屋の掃除だって完璧で、塵一つ存在しない。

……なーんて事はあり得なかつた。

最初の数日こそ部屋の状態に気を配っていたが、気付けば其処ら中に服が散乱し、テーブルの上は常に少年マンガや少女マンガが積み重なり、そして空のカップ麺と空のコンビニ弁当で占領されている。

言うまでもなく洗濯籠には何も入っておらず、その代わり洗濯機の中に直接洗濯物が放り込まれている始末だ。早くも自由気ままな自堕落生活の開始である。

そんななつきは学校帰りにコンビニに寄り道をして、お弁当かカップ麺を今夜の晩御飯として買ってから帰宅するのがお決まりのパターンであり、本日も無事そのルーティーンをこなしてマンションへと帰って来た。

面倒なセキリティイーを解除してエレベーターに乗り込み、最上階でチーンと軽快な音が鳴ると同時に鍵を求めてポケットをまさぐりながら歩き出す。

そうして自分の部屋が目の前に迫った頃、おもむろに左隣……今のなつきから見て右側の部屋のドアが開いた。当然その部屋の住人であるあのはんなり京美人の藤乃静留が現れて、なつきと目が合うなりニツコリと微笑み掛けてくれる。

「あら玖我さん、奇遇どすなあ。

もしかせんでも、学校帰りやるか？」

「え、あ、はい」

「風華学園の生徒さんやったんやねえ」

その言葉を聞いた瞬間、なつきはきよんとした。何処に通っているかなんて一言も言っていなかったのに、自分が通っている学校の名前を見事に当てられたからだ。

となれば訊かずにはいられないのが人の性であり、次の瞬間には「どうして知ってるんです……？」と訊ねていた。

すると何故か静留は不思議そうな顔でなつきを見詰め返した。

「どうして、て……その制服、この辺では進学校でらしい有名なんよ？」

「えっ、そうなんですか？」

「……ご存知やなかったん？」

「父さんが勝手に決めたから……どうりでヤケに授業が難しい訳だ」

「ふふっ、そうやったん。」

まあ確かに風華学園は進学校なだけに他よりも進んできますからなあ。

生徒による生徒の為の自治を……なんてリンカーンみたいな事言うて生徒会に殆どの権利与えたりしてますし」

「へえー……ヤケに詳しいですね」

「ああうち、風華学園のOBやから。」

それに元生徒会長やしね、詳しくうて当然ですえト」

歌うような口調でそう告げられたなつきは、思いもしていなかった事実がこの日一番驚いた顔を見せた。

「まさかあの人がうちのOBだとは思わなかったなあ」

自宅に帰ってコンビニのお弁当を咀嚼していたなつきは、先程の出来事を思い出して感慨深そうに呟いた。

“ お隣の京美人が自分の先輩に当たる人だった ”

言ってみればそれだけの事であるのに、同じ学校に通っていたと言う共通点が嬉しくてならなくて、その感動はなつきにいつものコンビニ弁当を普段の三割増しで美味しく感じさせていた。

何せ此処は本当に見知らぬ土地である。

だからこそ心許なくて、隣の人が優しそうな人だと言うだけで安心した。

しかもその人と実は共通点があった。

「なんだか運命みたいだな……なんて、少しロマンチスト過ぎるか」

シニカルな面持ちでそうごちて、なつきはカップに入った味噌汁を啜る。

とその時、インターホンが鳴った。

唇にワカメを張り付かせていたなつきは慌ててそれを

飲み込んで、誰が来たのかを確認する為にソファから降りて小さなモニタを確認する。

其処には、先輩の藤乃さんが映し出されていた。

一体なんの用件で訪ねて来たのかは判らないが、この人なら此処で通話しなくても良いだろうと玄関に向かい、そしてガチャリとドアを開ける。

「あ、玖我さん、いきなりすみません」

「いえ、それよりどうしたんですか?」

「もし良かったら……これ、受け取って貰えへん?」

静留はそう言いながら、藤色の布で巻かれた四角い物をなつきに見せた。

「え、と……これは?」

「お惣菜」

「……えっ?」

「玖我さん、さつきコンビニのお弁当持ってはったやろ?」

育ち盛りにあないなもんはあんまり、なあ?

そやからうちで余ったもんなんやけど、詰めてみましたてん。

お口に合うかどうか判りませんが、良かったら明日の朝ご飯にでもしとくれやす」

「えっ、あ、ありがとうございますっ!」

けど、なんか、すみません……」

「そない恐縮せんといっておくれやす。

単なるお節介なんやし、ね?」

そう言つて朗らかに笑つてくれる静留に、なつきはなんとも言えない気持ちになつてしまふ。

あまり他人に優しくされる事がない為、どう言う表情をしたら良いのか判らないのだ。

しかしこう言う時、なんて言えば良いのかは判つてい

る。

「ありがとうございます」

なつきは本当に感謝しながら、静留からの優しさをありがたく受け取つた。

だがその時、なつきは不意に気付いた。

静留の左手の薬指に、指輪が嵌められている事に。

「え、結婚して……う」

それは本当に思わず呟いてしまった言葉だった。

なつきはすぐハツとして口を嚙み、そして窺うように彼女を見上げる。

するとてつきり気分を書したかと思つていたのに、単純にきよとんとしている表情と出会つた。

お蔭で逆になつきの方がきよとんとなつてしまふ。

それが可笑しかったのか、静留は楽しそうに瞳を細めた。

「今、気付きましたん？」

「え、ええ……あの、すみません」

「なんで謝らはるん？」

「その、なんか」

「ふふつ、面白い子おやねえ。」

けどうちが結婚してるん、そんなに意外どした？」

「はい……なんて言うか、他の人の気配みたいなの感じなかったから」

「あら、ここう見えて結婚三年目なんよ？」

「ええっ!？」

静留がそう答えれば、なつきは更に驚いた表情で思わず声を上げた。

しかしそれも無理のない事である。

かなりしつかりとした防音施工がされているようで、階下も含め隣の生活音が一切聞こえない上に、朝学校に行く時だつてそのような人が出て来た所を一度も見た事がなかった為、独身だと思ひ込んでいたのだ。

それに其処まで頻繁に顔を合わせる訳でもなかったし、何よりわざわざ人の手なんて見ないのもあつて、余計に今の今までお隣さんが結婚しているなんてなつきは全然気付かなかつた。

「まあ、確かにうちが独身やて思つても仕方あらへんかもしれませんなあ……。」

彼、お忙しい人やから朝ははように出て、夜はおそうに帰つて来ますさかいに」

「そうなんですか……少し、寂しいですね」

「意外とそうでもないんよ？」

お天道さんが出とる間は自由気ままやからね」

そう言いながら、静留はくすくすと笑つた。

なんだか旦那なんか居ない方が良いと言つているように聞こえる言葉に、なつきは返答に困つてしまふ。

すると彼女は勘が良いらしく「あ、変な意味とちやいますか？」と言つてフオーローを始めた。

「いくら好きで結婚したて言うても、ずうつと一緒におつたら流石に疲れてしまいますし、適度に一人の時間があれば、その分、相手の事が恋しいと思えますやろ？」

「はあ……私にはまだ、判らない世界です」

まだ誰かを好きになつた事がないなつきには、静留の言つている事が良く判らなかつた。

その反応に何かを察したらしい静留が「玖我さんはほんとに可愛らしい子おやねえ」と声を弾ませる。

それにウブななつきはわたわたと焦つて顔を赤くした。

そうして事ある毎に赤面させてくれるお隣さんではあったが、初めて会つた時に感じた通りとても気が良い人で、顔を見れば笑顔で挨拶してくれるし、今回のようにたまに余つたおかずをお裾分けしてくれる事もあった。

どれも程々で、決して鬱陶しいなんて思わない。

それに彼女が作ってくれるものはなんだつて美味しかった。

お蔭でコンビ二弁当を食べるのが少し辛い位で、なんだか胃袋を掴まれてしまったようだとなつきは思わず苦笑いを漏らす。

しかし自立を促す為にもこうして一人暮らしをする事になつた立場からすると、結局誰かに頼つてゐる事に対して些か思う所があり、部屋の掃除位は頑張ろうとなつきは貴重な休日を利用して雑巾片手に孤軍奮闘していた。慣れていない所為で相変わらずその手付きは不器用極まりなかつたが、かなり頑張つた甲斐あつて誰かを呼んでも大丈夫程度には綺麗になつた。

「つふう……これで後五日は掃除しなくても良いな！」
キラキラとした笑顔を浮かべつつそんな事を呟く辺り、やはり当分干物女から脱却出来そうにはない。

そんななつきは額に浮かぶ汗を拭いながら壁に掛けてある時計を確認する。

休日だから時間を気にする必要はなかつたが、暗くなるるまでまだ随分ある事が判ると、ついだに“足”の方も手入れしてやるかと思ひ立ち、意気揚々と新しい水を注いだバケツと雑巾、それと工具セットを持って外の

駐輪場へと走って行った。

その先にはいかにも高そうなダークブルーのバイクがあり、なつきは我が子を慈しむようにシートを撫でる。

そう、このバイクこそがなつきの愛車だったのだ。

「ふふっ、今綺麗にしてやるからな！」

ご機嫌にそう宣言するなり、なつきは早速愛車を可愛がり始める。

外装に付着した泥汚れなどを濡れた雑巾で拭い取り、それが終われば乾いた雑巾で拭き、ピカピカに磨き上げれば新車とそう大差ない輝きを取り戻した。

だがまだ終わりではない。

なつきは軽くメンテナンスをしようと地べたに座り込み、ホイールやチェーンの具合を確認していく。

そしてサビがあれば丁寧に落とし、動きが悪ければ専用の油を差し込む。

麗らかな陽気の中でやっている所為でじわりと汗が浮かんで来るが、それでもなつきは楽しそうにバイクをいじっていた。

と、そんな時だった。

「あら、玖我さんやない」

そう言つて姿を現したのは、お隣の藤乃さんであった。もはや聞き慣れた声となったソレを聞いたなつきは反射的に顔を上げてその姿を視界に収める。

どうやら買物帰りだったようで、細い腕にはエコバッグが提げられていた。

「玖我さん、バイク乗つてはんの？」

地べたに座りながらバイクに向かって作業しているなつきを、静留は何処か物珍しそうな顔で見詰めながらそう問うた。

それに対して、なつきは良い笑顔ではいと答える。

「そうなんですか……けど、確か大型って……」

「あ、違いますよ。」

大きいように見えるけど、ちゃんと中型だから私にも乗れるんです」

「へえ、そうなんやねえ……」

「もし良かったら今度乗つてみますか？」

あまりに興味深そうに見詰めるものだから思わず誘つてみたのだが、静留は思っていた以上に反応した。

「えっ……よろしいの?」

「勿論。それにいつもお世話になつてゐるから、そろそろお返ししたいと思つてたんですよ」

「良かった、迷惑に思われてなかつたんやね」

「迷惑だなんてそんな! いつも感謝してますっ」

「ふふふっ、そうみたいで良かったわあ」

「だからドライブに行きましよう。」

あ、夜の峠をかつ飛ばすのも爽快ですよ!

……つて、藤乃さんはそんなタイプじゃないか。

それに旦那さんが許してくれないですよね」

手首を捻つてブオンブオンとアクセルを回す素振りをしていたなつきは、そう言いながら苦笑いを浮かべた。

夜、見知らぬ小娘に妻を連れ出されて高速で峠を駆け抜ける……。

そんなの夫からすれば言語道断だろう。

だから目に見えてしょんぼりとしたなつきに、静留は意外にも首を横に振つた。

「そないな事ありませんえ。」

それにうち、いつつも家におるさかい、たまには外で

遊びたいんよ。

バイクにも乗つてみたいし……そやから玖我さんの都合のええ日に、うちをドライブに連れてつて貰えんやろか?」

そうおねだりした静留は、頬を薄っすらと紅色に染めながらはにかんだ。

それはとても愛らしい笑顔で、なつきは思わず見惚れてしまう。

となればもう答えなんて決まり切つていて

「——ええ、勿論!」

次の瞬間、なつきは弾けんばかりの笑顔でそう応えた。そしてその夜。

「なあ、今度友達と夜におうてもよろしいやろか?」

静留は自分が作った料理をテーブルに並べながら、少し困つたような笑顔で自分の夫に早速お伺いを立てた。

なんて事のない質問ではあるが、しかし結婚して以来このような事を言われた事のなかつた夫は思わず目を丸

くして妻を見詰めてしまふ。

その様子に静留は悲しそうに眉を擧めて「やっばり、あかん？」と呟いてみる。

それに夫は焦つて首をぶんぶんと横に振つた。

「い、いや、そんな事は全然、ないんだけどさ」

「けど？」

「突然だったから、少し驚いたんだ。

それに君がそんな事を言うなんて珍しいから。

僕としては構わないけど……夜つて、何時位？」

「そうどすなあ……十八時から二十一時位の間やろか。

どんなに遅くても、二十二時までには帰つて来るつもりどすえ。

やっばりうちが家におらへんと、帰つて来た時えらい

寂しいと思えますし？」

静留がニヤリと笑いながらそんな事を言えば、夫はシニカルな笑みを妻に見せた。

「なんだか悔しいけど、全く以てその通りだよ。

帰つて来て一人だなんて、今更考えられない。

ホント、いつの間にこんな身体にされたんだか」

「ふふつ、またそんな上手い事言わはつて。

ビールはこれ以上増やしてあげませんえ？」

自身の腰に回されて来た腕をベチンと軽くはたいてそ

う言い放つた静留に、こう言う意味でも全く勝てないな

と夫は苦笑してしまふ。

そんな夫は冷えたグラスに入れられたビールを手にし

ながら、改めて静留を見詰めた。

「けどさあ……やっばり心配だな。

友達つてのは、女？ それとも男？」

「女性どすえ。

近々こちらに来るから会わへん？ つて誘われたんよ」

「そっか、なら安心だね。

あー……でも、もし早く上がれるようだったら、帰りは僕が迎えに行こうか？」

なんだつたら友達帰りの足になってあげても良いし」

ハンドルを操作するかのよう片手を動かす夫に、エプロンを取つていた静留は余計な気遣いをしなくて良い

と思ひながら振り返る。

勿論その顔は「淑やかな妻」であり、女性としても魅

力溢れる貌に夫の頬は自然と緩む。

「あら、そんなんええんよ。」

仕事終わりはやっぱり疲れたはるよろし」

「君の為ならへっちゃんらだよっ」

「またそないな事言わはって……。」

それに友達はちいとばかり遠い所に住んではってなあ。

帰りの足はもう自分で確保したはるんどす」

「そうなんだ？　じゃあせめて君を迎えに行くよ」

「そんな氣い回してくれはらんでもええんよ？」

近所で会うだけなんやし。

でも……心配してくれはって、えらいおおきにな」

そう言って、静留は朗らかに笑った。

その笑顔は本当に美しく、夫は思わず赤面する。

こんな人を独占出来るなんてホント幸せ者だよな、なんて思いながら。

そんな夫を他所目に、静留は再びキッチンに戻った。

確かに笑顔を浮かべてはいるが、その瞳に情愛と言ったものはこれっぽっちも宿っていない。

それは当然の事だった。

——何故なら静留は、夫に対して何一つとして想いを抱いていなかったのだから。

言ってしまうえば、心底どうでも良かった。

何かあつて夫への愛が冷めてしまった訳でもなんでもなく、そもそも静留は夫に恋愛感情なんてものは最初から全く抱いていなかった。

ではどうして結婚したのか。

それは静留が京都の旧家の生まれである事と、唯一の跡取り娘と言う事が起因している。

時代遅れな事甚だしいが、いずれ世間体の為に誰かと結婚しなくてはならず、それがたまたまこの相手だったに過ぎない。

それに地位も名譽もある男の場合、大抵驕っているものだが、この男は珍しく純朴であった。

オマケに親が代々続いている大財閥だからか、変な独占欲やがめつさと言ったものはなく、惚れた弱みと言うものを上手く使えば、言いなりにする事だって容易いよ

うに思えた。

どうせ結婚しなければいけないのなら、御し易い方が
良い。

それがこの男を夫に選んだ理由である。

そして、それだけだ。

でなければ今日も遅く帰って来てくれないだろうかと
毎日願ひ、夜になれば密かに募るストレスをどうして
くればよいかと思ひ悩み、本人が帰って来れば、笑顔の裏で
舌打ちばかりするなんて事はないだろう。

紛れもない政略結婚なのだから、恋愛感情がないのは
仕方がない。

しかし何故こうまで結婚相手を嫌悪するのかと言えば、
至極簡単なながらも複雑な理由があった。

それは静留が女性にしか興味がなかったからだ。

なのに家の為に男を迎え入れなくてはならず、夜が更
ければ抱かれなくてはならない。

静留は自分自身の性が気に入っていたし、女性である

事に誇らしささえ覚えていたが、抱かれている時ばかり
は男だったら良かったのと思わずにはいられない程辛
くて、苦しくて、いつも歯を食い縛る思いをしていた。
そんな我慢をもう三年も続けていれば、夫に対する好
意なんてまるで芽生えなくて当然だろう。

そんな静留は、玖我なつき、と声に出さずに呟く。

可愛いお隣さんだ。

見た目のクールさとは違い、とても純朴で愛らしい。

夫も純朴ではあるが、それとはまた違っている。

女性が好きだから特にそう感じるのかもしれないが、
少なくとも静留にとっては、なつきの方が断然好ましく
感じられていた。

だからこそ、何かとちよっかいを掛けてしまう。

かと言って性的な目で見ていいのかと言えば、それは
否だ。

日々の鬱屈した生活の中で、オアシスを見付けたよう
な純然とした気持ちだったからだ。

そんな彼女ともっと一緒に居たくなって、ドライブの
お誘いを受け入れた。